

● シリーズ 私の見た日本 Vol.219

日本のなかの神社とお祭り、そして「頑張る」精神

AHNS, LAILA MALIN (ライラ マリン, ヤーンズ)

2001年、ドイツのボンで生まれる。2016年に初めて日本に留学、1年間を主に熊本で過ごす。2020年HAWK応用科学芸術大学入学、Faculty Bauen und Erhaltenで建築を専攻。2023年4月から半年間、大阪工業大学建築学科にて留学



私は高校と大学時に二度の日本留学をしました。この留学を通じて経験した「私の見た日本」を紹介したいと思います。

この原稿を書くことは大変難しかったです。なぜなら、私は、日本をすごく好きになり、書きたいことが沢山あるからです。「なぜ日本に来たのですか?」「なぜ日本を好きになりましたか?」、この質問は初めて会う日本人からとてもよく聞かれます。的確な答えは見出しにくいですが、考えればさらに日本のことを好きになっています。

私はライラです。ドイツの大学で建築を2年間勉強して、2023年春から大阪工業大学に半年間留学をしました。この原稿を書いている2023年夏現在、私は22歳で、日本に最初に来た時は15歳でした。その時は自分自身もドイツの家族も日本のことはよく知りませんでした。なぜ日本に行きたかったのか、強い理由はありませんでした。ただ、未知の国、新しい文化を知りたいということを感じていました。そんな心づもりで15歳のときに初めて日本の成田空港に着きました。入国ゲートを出ると、私たちドイツからの留学生たちを留学マネジメント会社の人が迎えに来ました。ドキドキしていましたが、私は車の中ですぐ眠ってしまいました。友達が私を起こしてくれ

たとき、目をあけると車はレインボーブリッジの上を通っていて、私の目には8月の青空と青い海、そして東京の街並みが隅から隅まで見えました。この異国の地での感動的な眺望は一生忘れません。

その日の夜に初めて川崎のホストファミリーの家に行きました。その時はまだ日本語がわからなかったので、辞書で単語を示したり、ジェスチャーで話したりしました。「外に行こう」と手招きされてホストファミリーと一緒にしばらく歩くと賑やかな場所に着きました。そこはまさに私が想像していた日本でした。浴衣を着た人たちと日本の食べ物の屋台がありました。私は日本の祭りの真中に突然引き込まれていました。タイムラグと旅疲れがありましたが、このとき「日本に来た」と実感しました。これが私の最初に見た日本です。

最初の2週間は東京で過ごし、その後の10カ月間は九州の熊本で生活しました。熊本では日本の文化をしっかりと経験することができました。自分と異なる文化に多く出会い、日本が徐々に好きになっていきました。まだ15歳だったので、そのときのホストファミリーは日本でのかけがえのない家族になりました。留学の前は1年間日本に行くだけだと思っていたけれど、熊本のホストファミリーは第2の

実家になりました。熊本はすてきな文化があり、きれいな自然、あたたかい人たちがいて、平和な思い出がたくさんできました。

7年後に再び留学した大阪は、熊本の印象とは全然違いました。大阪は様々な人や企業が集まるところなどが、私の出身地であるベルリンと雰囲気少し似ていました。大阪の人々は気さくで話やすく、様々なことをディスカッションできました。関西の人は自分の気持ちに正直でとてもオープンです。大阪では色々な意見を交わすことができ、自分の考え方も発展しました。世界の違いは、文化ではなく、人によるものが大きいと実感しました。大阪に半年間生活していたので、大阪も好きになりました。

大阪で建築を勉強できたのはすごく良かったです。大阪の大都市のまわりには、京都、奈良、神戸などがあり、異なる特性の街や建築にたくさん接することができたからです。日本人の建築に対する考え方はドイツと異なることが多く、創造性や新しさを追求する姿勢が際立っていました。先生たちの指導を受け、学生たちと議論し、多くの建物を見て感じ、様々なことを考えました。そして、建築はまだまだ新しいトライができることを学びました。

ドイツは地震がないので、石やレンガをたくさん使っています。それ以外の材料はあまり重視されません。しかし、日本では地震に対応した鉄筋コンクリートや鉄骨を多く使っています。そして、近年では木材を使い地震にも耐えられる新たな建築が模索されています。ドイツでも気候変動に対応して、自然に優しい材料の検討が始まり、木造建築に目を向け始めています。日本での新たな建築の取り組みは参考にできることがたくさんあります。

今回の留学では、大阪工業大学建築学科で学び、設計課題では住宅設計にも取り組みました。日本の住宅では靴を脱いで上足での生活を考える必要があり、空間の大きさの思想に畳(人が一人眠れる大きさ)のモジュール

があります。それらの考え方を基軸に設計した経験は大変有意義でした。この日本での住宅設計の考え方は興味深く、今回の演習や座学で初めてこのことに向き合い、考え、設計したことは良い経験になりました。

ほかにも文化の違いを深く感じたことは、ドイツの教会と日本の神社の違いです。教会と神社の存在は、都市のありようや雰囲気を大きく変えます。神社は、6年前に日本に行ったときから好きでした。どんな大きな街の中でも大きな境内と森をもった神社があり、そこは、いつも静かで、鳥のさえずりが聞こえます。神社では街の騒音が聞き消され、日本の精神性を感じました。日本で建築の魅力を感じたのは、熊本の3つ目のホストファミリーの近くにあった藤崎八幡宮でした。ホストファミリーの家業は餅屋で、八幡宮の参道に面して店があり、八幡宮との関係も深かったです。藤崎八幡宮の本殿は、静かな参道の奥にありシンプルな配置の社殿は美しいです。藤崎八幡宮は木造でつくられており、柱などは明るい朱色で塗られています。境内のなかでは道路の喧騒も聞こえず、心の底から平和

な気持ちになりました。ホストファミリーから神社の文化をたくさん教えてもらい、高校に行く前には毎日お参りしてから登校していました。今でも熊本に帰ると藤崎八幡宮に行って「ただいま」と言っています。

4年前、藤崎八幡宮の祭りを準備期間から体感し、私もお餅づくりなどを手伝いました。何週間も前から神社を中心に人々が集まり、街はお祭りモードになって、みんなが祭りを心から楽しみにしているのがわかりました。神社を起点にした祭りが日本の生活の根底を支えているのだと感じました。日本の祭りはすごく好きなので、日本の様々な都市の特色あふれる祭りをもっと体感したいと思います。

私の見た日本のなかで特徴的な言葉は「頑張る」です。「頑張る」という言葉は英語にもドイツ語にもないので、本当の意味がわかるまでに時間かかりました。「頑張る」という言葉は日本人や日本の本質を表していると思います。日々「頑張る」という言葉が聞こえてきて、日本人の人は当然のようにそう言います。私はこの「頑張る」はすてきだと思います。日本人の頑張る例として熊本城をあげます。

2016年に熊本に来たとき、熊本は大地震の後でしたので、熊本城は建物や石積みなどの多くが壊れ、復旧には40年間かかると言われていました。しかし7年後に熊本城を訪ねるとほとんどが復旧されていました。日本人の「頑張る」という精神はすばらしいと思いました。

建築以外に、日本の自然もすごく好きでした。奈良の山奥で見た満天の星、四国のきれいな海や島々、車窓から見える山々の重なり、日本のように美しい多様な自然が多くあるところは他にはありません。豊かな自然に対峙して、その美しさに見惚れ、佇むことが多くありました。

まとめとして、日本が好きなのは、大きな街ときれいな自然、そして、優しい人と深淵な文化です。日本にまた帰ってくる機会をつくり、日本語、日本の文化、そして日本の建築をもっと勉強したいと思います。7年前、日本をこれほど好きになるとは想像していませんでした。人生において稀有な経験ができた日本、そして日本人に感謝しています。ありがとうございます。

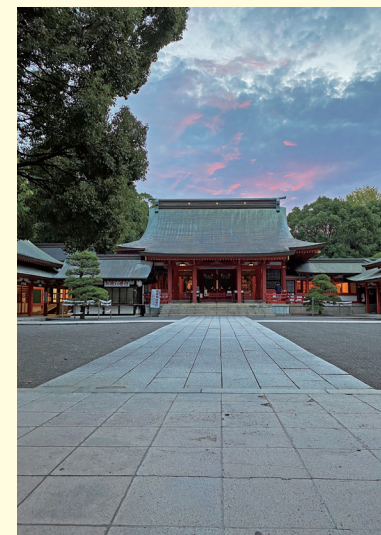
(翻訳:大阪工業大学工学部建築学科 教授 寺地洋之)



レインボーブリッジ



設計課題のプレゼンの様子



藤崎八幡宮



お祭りの様子



お餅づくりの様子



上/復興中の熊本城 下/再建後の熊本城